《野中の爺さまとキツネ》

むかし、野中の村に気のよい爺さまがいた。ある日、用事があって雀柳の親方の家まで使いに出かけた。観音様の鳥居をくぐり野原に出るとやぶかげで何かが動いている。よく見ると三匹の子ギツネが相撲をとって遊び、親ギツネがこれをニコニコして見ているのであった。「ヨーシ」と爺さまはソロリソロリと近づいてワァーとありったけの大声をあげた。イヤ、おどろいたのなんの、キツネは林の中にころがるように逃げこんだ。そのカッコウのおかしいのなんの、爺さまは腹をかかえて大笑い。さて、雀柳で用事を済ませた帰り道、また観音様の傍らを通りぬけようとしたところ道に一文銭を百枚（一〇銭―一円の一〇分の一）みご縄に通した青さしが落ちている。「誰が落としたのだべ、ヨシヨシわしが拾っておいて後で落とした人に届けてやろう」とその青さしを懐中に入れ、また歩きだした。しばらくするとどうも体がバンバ（大便）臭い。はてな？　と懐中に手をやるとグニャと生あたたかい黄色いモノ。驚いて立ちつくすと遠くからキツネの声がコーン。